

故西村 晃先生を偲んで

清 川 義 友

昨年暮れの12月18日に、同志社大学経済学部教授として多くの貢献をなされた西村晃先生が、50歳でお亡くなりになった。無事に新年をお迎えになることとばかり思っていた私達にとっては、思いがけない訃報であった。

思い起こせば、私が西村先生に初めてお会いしたのは、大学院に入学して間もない頃である。当時はまだ明徳館に研究室があったが、ご挨拶に伺った折に、短時間ではあるが暖かな笑顔で話しかけて下さったのを覚えている。その頃先生はまだお若く、助手(研究員)をなさっていたが、何もわからない私と同期の友人に向って、「毎週一緒に研究会をしましょう」と誘って下さった。そこでの勉強が、その後どれ程役に立ったかわからない。

主に取り上げられたのは、従来のワルラス的な均衡理論と異なる世界を開拓しようとする、「不均衡理論」の分野であった。クラウアーやバローの論文を読み進み、よくわからない箇所は丁寧に教えて下さった。終わったら、すっかり日が暮れていた事も度々あった。

西村先生の主要な研究分野の一つは、この不均衡理論の領域であろう。ソロー＝ステイグリッツやボレなど欧米の新しい研究を踏まえて、「不均衡における雇用調整と実質賃金率」と題されたご自分の研究成果を、理論・計量経済学会の秋の大会で発表された。その時、コメンターであった阪大の蠟山昌一先生が、「理論の展開部分については何も問題がないので、前提条件についてだけ質問させて頂く」と言われたという事を、後になってお伺いした。

西村先生のもう一つの重要な研究分野は、インフレとフィリップス曲線に関するものである。恩師の中島先生のご紹介で、先生はわが国における近代経済学の大家である安井琢磨先生の下に、一年程勉強に通われたことがある。その折に安井先生からご自身の研究テーマについて尋ねられ、このテーマをお答えしたと話しておられた。フィリップス曲線の理論的基礎に関する先生の綿密なご研究は、まだわが国でこの分野の研究が少

ない時期になされたものである。その頃、フィリップス曲線の計量分析で知られる神戸大の豊田利久先生が中島先生の研究会にお見えになったりして、色々と学問的交流があったようである。また研究会や大学院の授業などにお越し頂いた、大阪府大におられた和田貞夫先生とは長らく親しくされており、学会の終わった後などを利用して、ご一緒によく旅行に行かれたりなさっていた。

その後西村先生は、学部の主任をなさったりして学校では多忙となられた。また1年間ご家族と一緒にカリフォルニア大学に留学され、ご帰国の際にはベナシーの授業内容などを聞かせて下さった。

ところで、このような研究面の他に、先生は教育面においても多くの優れた成果を残されている。誠実で温厚な先生のお人柄を慕って、多くの優秀な学生が西村ゼミに集まった。また当時まだお若かった為直接の指導はなさらなかったが、西村ゼミから大学院に進学して渡辺先生のご指導を受けた3名の全員が現在では同志社大学などで教職に就いている。

趣味の面ではテニスやゴルフ等のスポーツを先生は愛好され、ゼミ合宿ではよくその腕前をゼミ生に披露されたようである。よく日焼けされ、いつも健康そうに見えた西村先生であるが、仕事に対しては人一倍強い責任感をもたれ、手を抜かれるという事がなく、またいつも細かな心配りを絶やさなかった先生の真面目な性格が、いつの間にかお体に無理な負担をかけていたのではないだろうか。今から4年程前に、先生は急に体調を崩され、入院、そして手術をされた。長時間に及ぶ手術を無事乗り越えて、その後再び先生は、私達の前に元気なお姿を見せて下さった。しかし、次第に体力の衰えを感じておられたのであろう。「やりたい気持ちは一杯あるのに、体が気持ちについていけない」と、残念そうにおっしゃっていた。

昨年初夏に、「今年の夏は調子よく過ごせそうです」というお葉書を頂戴し喜んでいたのに、秋からはもう先生が楽しみにしておられたゼミの授業にお見えになることができなかった。後に残られた奥様、お子様、そしてお母様の悲しみと残念なお気持ちは、察するに余りある。そして私達もまた、西村先生がご自分の生き方で身を以て示して下さいた道を、できる限り歩み続けたいと願うのみである。

最後にあらためて、西村晃先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(『同志社時報』第97号より転載)